

研究報告

介護老人福祉施設で自分から人との交流をもとうとしない高齢者の思い

松田真澄¹⁾, 多田敏子²⁾

¹⁾徳島県立総合看護学校

²⁾徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部地域看護学分野

要旨 介護老人福祉施設においても、施設の個室に閉じこもる高齢者が増えてきている。

本研究の目的は、介護老人福祉施設で自分から人との交流をもとうとしない高齢者の思いを明らかにすることである。

介護老人福祉施設入所高齢者10人に半構成的面接を行った。対象者は、男性3人および女性7人で、平均年齢は76.8±7.9歳、入居期間は6カ月から14年であった。所属大学の倫理委員会審査で承認を得て行った。その結果、【この暮らしになじめない】、【周りに人がいるけれどさみしい】、【ここではしたいことがない】、【自分から人とかかわりたくない】、【体の調子が悪いので何かをしようと思わない】、【気兼ねせず好きなようにしたい】、【人に迷惑をかけたくない】という7つのカテゴリーが抽出された。人や環境に対してなじめないで、自分から人とかかわり、したいことを見つけようとする事ができず、体調不良や人に迷惑をかけたくないという思いが、新しい環境に働きかけることを消極的にさせ、さみしい思いで過ごしている高齢者の姿が浮かび上がってきた。

今後に向けては、高齢者が新しい環境になじめるような場づくりや、入居当初から関係形成を計画的に進めることが必要と思われた。また、活動が消極的にならないように体調管理が重要であると考えられた。

キーワード：思い、高齢者、介護老人福祉施設

緒言

後期高齢者が増加する中で、高齢者の健康寿命を延伸することが社会的な課題となっている。先行研究では、高齢期における閉じこもりが社会的変化や心身の機能低下を招き、寝たきりや認知症の原因となることが指摘されている¹⁾。蘭牟田²⁾らは高齢になるにつれて身体能力、とりわけ歩行能力の低下により閉じこもりを招くことを明らかにしている。古田ら³⁾は、健康状態と外出頻度との関係に有意差はない、としているが、恒吉ら⁴⁾は、「閉

じこもり群」は「非閉じこもり群」と比較して男女ともに握力、膝進展力、脚伸展パワー、ステップングおよび最大歩行速度が有意に劣っていたと報告している。新開ら⁵⁾は非閉じこもり高齢者を対象に追跡調査した結果、親しい友人の存在、散歩、体操の習慣、集団活動への参加、趣味・稽古事などをすることが移動能力の高い高齢者の閉じこもり予防に繋がると報告している。しかし心理的要因や社会環境要因に着目した閉じこもり予防・改善策については、その背景が多様であり効果的な対策に関する研究は少ない⁶⁻⁹⁾。

特に、在宅高齢者に比べ、介護老人保健施設や介護予防拠点施設での過ごし方に関する先行研究^{10,11)}には、他者との関わりをもたない高齢者に対する研究は見当たらない。従って、本研究では自分から人との交流をもとうとしない高齢者の思いに注目し、高齢者にとっての閉じ

2013年12月2日受付

2014年1月28日受理

別刷請求先：多田敏子，〒770-8503 徳島市蔵本町3丁目18-15
徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部地域看護学分野

こもりの意味を検討した。この成果は、高齢者が一人で過ごすことへの意味を理解し、閉じこもり高齢者に対する定義を見直す示唆を得ることにつながると考える。

研究の目的

介護老人福祉施設（以下施設）で自分から人との交流をもとうとしない高齢者の思いを明らかにすることを目的とした。

本論文に用いた用語の定義

本論文においては、「交流」、「思い」、および「閉じこもり」の用語を以下のように定義して用いた。

「交流」は、個人あるいは集団のなかで共に行動し、他者とのやり取りが行われること、と定義した。

「思い」は、一人で過ごしている時に生じる心の状態、と定義した。

「閉じこもり」は、自分から他者とのかかわりをもとうとしない状態、と定義した。

研究方法

1. 研究デザイン

本研究は、施設入居者の中で、自分から人との交流をもとうとしない高齢者の思いを明らかにすることを目的とした質的帰納的研究である。

2. 対象者

本研究の対象者は、施設入居者の中で、認知障害がなく会話が可能な高齢者であり、移動能力があるにもかかわらず、自分から人との交流をもとうとしない高齢者10人であった。対象者の選定にあたっては、施設代表者に研究の趣旨を説明したうえで入居者の状況を熟知している複数の施設職員から候補者を選定するよう依頼した。了解を得られた入居者に対して、改めて研究者より口頭と書面をもって研究内容について説明し、同意を得られた入居者を対象とした。

対象者が入居している施設の概要は、A県内住宅街にあり、在宅介護支援施設、デイサービスなどの複合施設を有し、90人程度の入居者がいる。平均年齢は82歳で男女比は1:3.7である。クラブ活動や誕生会、季節ごとの行事なども盛んに行われている。

3. データー収集期間

データー収集期間は、平成23年8月1日～10月30日であった。

4. データーの収集方法

データー収集は、自分から人との交流をもとうとしない高齢者の思いについてインタビューガイドにもとづき、半構成的面接を2回行った。面接は、語り手の自然な話の流れに沿って思いを傾聴するように進めた。面接場所は、施設の対象者の個室で行った。また、面接の内容は、対象者の承諾を得たうえでICレコーダに録音し、語られた内容より逐語録を作成しデーターとした。

なお、インタビューガイドは、①一人で過ごすことへの思い（一人でいるときの過ごし方、その時どのような気持ちですか）、②他者と一緒にいるときと比べた思い、③一人で過ごすようになってからの思い、④他者との交流についての思い、⑤今後どのように過ごしたいか、を問うたものである。

5. 分析方法

データーの分析は、質的帰納的方法で行った。対象者ごとの逐語録を繰り返して精読し、高齢者の思いを表現している内容を抽出し意味内容で区切りコード化した。コードの類似性と差異性を比較検討し、共通する意味をもつものを分類した。さらに、看護学研究者の定期的なスーパーバイズを受けながら、抽象度のレベルについて比較検討し、抽象化を図った。カテゴリーがそれ以上のデーターを加えても不動なものとなったと確信できた時点で、分析が飽和に至ったと判断した。

6. 倫理的配慮

本研究は、徳島大学臨床研究倫理審査委員会の承認(承認番号1203)を得て行った。

本研究の対象者については、事前に対象者と施設の管理者に本研究の意義と方法について口頭と書面を用いて説明した。同時に、研究参加辞退の場合も不利益を被ることがないこと、研究期間内での途中辞退ができることを説明し、対象者からは書面をもって同意を得た。この時、データーの厳密な管理、プライバシーの保護を厳守すること、学術的な目的のみで使用することを説明に加えた。

結 果

1. 対象者の概要 (表1)

研究対象者10人の平均年齢は76.8±7.9歳であった。施設への入居期間は6カ月～14年であった。

いずれの対象者も、自室で身の回りのことは自分で行うことができると回答した。

1回目のインタビューに要した一人当たりの時間は、25分から74分で平均39.8±15.5分であった。2回目のインタビューは、10人のうちC以外の9人に行い、インタビュー時間は31.9±16分であった。

2. 面接内容の分析結果

対象者10人の面接内容の逐語録より、施設で自分から人との交流をもととしない高齢者の思いを表す記述は316抽出された。これらのデータは内容の類似性により、53のコードに抽象化し、最終的に7つのカテゴリーが得られた(表2)。

データ分析により得られたカテゴリーは、【この暮らしになじめない】、【周りに人がいるけれどさみしい】、【ここではしたいことがない】、【自分から人とかかわりたくない】、【体の調子が悪いので何かをしようと思わない】、【気兼ねせず好きなようにしたい】、【人に迷惑をかけたくない】であった。

以下、カテゴリーは【 】で、コードは「 」で示し、カテゴリーごとに特徴を述べる。

① 【この暮らしになじめない】

このカテゴリーには、施設と家庭生活との違いに自分

自身の戸惑いや団体生活に対する不自由さを感じていることが、「まだまだ団体生活の勝手がわからない」「家のように自由にできないので、時間で決められたところは好きではない」「時間に追われる生活はしたくない」と表現され、新しい生活の中での自分自身の思いについて語られていた。

「時間がたくさんあるようで、時間が合わなくてできない」「いろいろとしなければいけないこともあるが、ここではなかなかできない」では、現在の生活について、家庭にいるときは家事などに時間を割いていたが、入居後は、食事などの心配がないため、何にもしなくていいという思いが表現されている。また、自由な時間はたくさんあるが、時間があっても行えていないことや趣味などしたいことがあるがしていないということについて語られていた。

「新しく入った人の顔も覚えられない」「信頼できるひとはいない」「気の合う人はいない」というように、入居後、次々と入れ替わる入居者に対して、顔も覚えられないということや、人に対し興味や関心が薄らいでいるということを語られていた。家庭などからの移行に対して、今までとは異なる環境の中で、新しい人間関係を作る以前に、信頼できる人や気の合う人がいないと環境に対してのなじみにくさを表現していたことから【この暮らしになじめない】と命名した。

② 【周りに人がいるけれどさみしい】

このカテゴリーでは、自分から人と交流をもととしない対象者が、ひとりであるときと大勢であるときとの

表1 対象者の概要

対象者	年齢	性別	入居期間	歩行状態	ひとりであるときの過ごし方
A	80歳代後半	女性	14年	独歩可能	・テレビを見る ・パッチワークをする
B	70歳代前半	女性	7年	歩行器使用により可能	・テレビを見る
C	80歳代前半	女性	6年	シルバーカー使用により可能	・寝る
D	60歳代後半	女性	6年	独歩可能	・テレビを見る
E	70歳代前半	女性	4年	シルバーカー使用により可能	・テレビを見る・寝る ・新聞のテレビ欄を見る ・昔の事を思い出している
F	70歳代後半	女性	4年	独歩可能	・テレビを見る・本を読む
G	60歳代後半	男性	3年	独歩可能	・テレビを見る
H	60歳代後半	男性	3年	独歩可能	・寝る
I	80歳代後半	女性	2年	独歩可能	・テレビを見る
J	80歳代後半	男性	6カ月	歩行器使用により可能	・ラジオを聴く

*C以外は、2回の面接を行った

表2 介護老人福祉施設入居中で自分から人との交流をもとうとしない高齢者の思い

カテゴリー	コード
ここの暮らしになじめない	信頼できる人はいない
	気の合う人はいない
	まだまだ団体生活の勝手がわからない
	家のように自由にできないので、時間で決められたところは好きではない
	時間がたくさんあるようで、時間が合わなくてできない
	時間に追われる生活はしたくない
	いろいろとしなければいけないこともあるが、ここではなかなかできない
	新しく入った人の顔も覚えられない
周りに人がいるけれどさみしい	大勢の人がいたデイサービスから帰ってきたら、ものすごくさみしい
	子どももひとり、孫もひとりしかいないから、いずれは私のようにさみしい生活をするのではないか
	一日中部屋にいと息が詰まるから、時々廊下のベンチに腰掛けて2時間くらい過ごすみんな部屋にいて、あまり会わない
	家でも外に行き帰ってきたらひとり、ここでもデイサービスから帰ってきたらひとりでさみしい
	ああひとりかと思って、ひとりの生活はさみしい
	いつも家族が面会に来る人もいれば、来ない人もいるので、子どもがいても将来面倒を見てくれるとは限らない
	外出先で、夫婦そろって来ている人を見ると、自分はそうでないのでさみしい
	ひとりだから楽しいことはない、ひとりの生活はさみしい
ここではしたいことがない	どうしても買いに行かないといけなものはない
	旅行にも行きたくない
	何もしたいことが無い
	体操には参加するが、他にしたいことがない
	ひとりだからなにをしても楽しいことがない
	友達がいなくなって、行きたいところがない
自分から人とかかわりたくない	新しい友人を作ろうと思わない
	人と話するのは嫌い
	いろいろな人がいて、それぞれ違うので付き合いは難しい
	人間関係は難しいので、もめるよりひとりでいたほうがいい
	心の中で思っても言えないこともある
	他の人とうまくいかず気を遣った
言いたいことも言わない	
体の調子が悪いので何かをしようと思わない	体の調子が悪いので親しい人も出来ない
	身体の調子によっては気がおかない
	座っておれないので人と話そうと思わない
	足が悪いので他人の部屋にいけない
	歩けないのでどこにも行きたくない
気兼ねせず好きなようにしたい	趣味が合う人がいない
	話が合う人がいない
	曜日毎の活動は好きでないので参加しない
	嫌なことはしたくない
	人と関わってもいろいろあるから、人と関わらなくてもいい
	気が向かない
	ひとりですきなようにしている
	親も兄弟もみんな死んでしまったので、誰にも気兼ねしなくていい
	嫌なことには何も言わないで聞き流す
	話しかけてきた人とは当たり障りのない話をする
以前の生活とは切り離しているから、入居する前の友人とは付き合いたくない	
人に迷惑をかけたくない	家族に迷惑をかけたくないので、ここに入ろうと決めた
	家族があまり外には出るなどというので、デイサービスのときしかでない
	80代になると出ていくのがたいそうになるし、危ない気がするので行けない
	骨折でもしたらみんなに迷惑がかかるので、外出しない
	友達が遊びに来たいと言うが、タクシー代がかかるから私がいに行くと行って、会いは行っていない
	友達が遊びに来て、隣の部屋の人とはドア1枚で声もよく聞こえるのでやかましいと思ひ、来ないでと言っている
	催し物も行かないと悪いので参加はするが、そおと帰ってくる
	寮母さんに食事を持ってきてもらうわけにはいかないから、腰が痛くて動きたくないが、食堂に行くのだけは、私の運動だと思って降りていく

思いの変化を語られていた。「大勢の人がいたデイサービスから帰ってきたら、ものすごくさみしい」「家でも外に行き帰ってきたらひとり、ここでもデイサービスから帰ってきたらひとりでさみしい」では、デイサービスに行く一つの部屋に集まって話をしたりご飯を食べたりしているが、その後で、自室に戻ると、その時にさみしさを感じると語られた。部屋に入ってもしばらく何もせずに立っていることがあり、「ああひとりかと思って、ひとりの生活はさみしい」という思いを語っていた。

「子どももひとり、孫もひとりしかいないから、いずれは私のようにさみしい生活をするのではないか」では、子どもの将来は本人にまかせてあることや子どもが県外で就職し、そのまま県外に住んだことと、結婚した相手が地元の人であれば郷里に戻ってくることもあるかもしれないが、地元ではないため、自宅に戻ってくることはないと言われた。孫に対しても、子どもは自分と同じように本人に任せているため、将来の自分のようなさみしい思いをするのではないかと語っていた。

「一日中部屋にいと息が詰まるから、時々廊下のベンチに腰掛けて2時間くらい過ごすみんな部屋にいるので、あまり会わない」では、食事以外の時間を自室で過ごすため、時々廊下のベンチに腰を掛けて外を眺めていたりすることや、同じ階の人が廊下に出てきて話しかけてくることもあると言っている。

「いつも家族が面会に来る人もいれば、来ない人もるので、子供がいても将来面倒を見てくれるとは限らない」「外出先で、夫婦そろって来ている人を見ると、自分はそうでないのでさみしい」「ひとりだから楽しいことはない、ひとりの生活はさみしい」では、入居前の背景はそれぞれ異なるが、ひとりの生活のさみしいという思いを表現していた。これらのことからカテゴリーを【周りに人がいるけれどさみしい】と命名した。

さみしいという表現をした対象者の入居期間はさまざまであり、歩行状態は全員独歩可能であった。

③【ここではしたいことがない】

このカテゴリーには、日常生活を過ごしていく中で食事以外は自室からあまり出ないという思いが語られていたことから【ここではしたいことがない】と命名した。

「どうしても買いに行かないといけなものはない」施設内にある売店で買うので、わざわざ外出しなくてもよい。「何もしたいことが無い」「体操には参加するが、他にしたいことがない」では曜日毎に体操やカラオケ、手

芸などサークル活動があるが趣味が合わないと参加していないという状況も語っていた。

「ひとりだからなにをしても楽しいことがない」「旅行にも行きたくない」「友達がいなくなって、行きたいところがない」では、施設内での旅行に以前は参加していたが、体の調子が悪くなったり、親しい人がいなくなってからは参加していないということを語っていた。親しい友人がいるときには、買い物に行くなど外出することも多くあったが、友人がいなくなると行きたいと思うところもなくなったということを語っていた。ひとりであるときの過ごし方についてはテレビを見る、寝るといふ、あまり毎日に変化のない日常であった。

④【自分から人とかかわりたくない】

このカテゴリーには、団体生活における人間関係が難しいという思いについて語っている。「新しい友人を作ろうと思わない」入居後間もないころは友人と一緒に出かけたりしていたが、友人が何らかの理由で施設からいなくなってからは、新しく友人を作るということはなく、ひとりで過ごしていると語った。以前にはやさしい人が多かった、今の人はきつい気がするという印象を語ることもあった。「人と話をするのは嫌い」では、職員や実習に来る学生に対しては話すこともあるが、その他はあまり話をするのは嫌いだからと語っていた。「いろいろな人がいて、それぞれ違うので付き合いは難しい」では、顔が違うように人は違うのでそれぞれ難しいと語り、「人間関係は難しいのでめめるよりひとりでいたほうがいい」では、今までの団体生活の中で何らかの嫌な思いをした経験などをふまえて語っていた。その結果、「心の中で思っても言えないこともある」「他の人とうまくいかず気を遣った」「言いたいことも言わない」と施設での生活を継続させる上で、さまざまな人との関わりから難しいと感じる場面を経験し、自分から人と関わるといふことを避けるような行動に至ったと語っている。入居以前からの人との関わり方をそのまま貫いている人や、入居後しばらくしてから人との付き合い方が変化してきた人が、それぞれの思いを語っていた。自分なりの人との距離の置き方や話の内容などについては、具体的に食べ物や動物の話をするほうが一番当たり障りがなくていいからと何度も語っていた。これらのことから【自分から人とかかわりたくない】と命名した。

⑤【体の調子が悪いので何かをしようと思わない】

このカテゴリーには、人との関わりの中で、健康状態が影響してくるとということが語られている。シルバーカーや歩行器を使用している対象者が「体の調子が悪いので親しい人も出来ない」「身体の調子によっては気がおられない」「座っておれないので人と話そうと思わない」「足が悪いので他人の部屋にいけない」「歩けないのでどこにも行きたくない」と語っている。日常生活のほとんどを自室で過ごしている理由として、身体的な状況が語られていたことから【体の調子が悪いので何かをしようと思わない】と命名した。

⑥【気兼ねせず好きなようにしたい】

このカテゴリーには、団体生活の不自由さや人間関係の難しさなどが語られており、誰にも気兼ねせずひとりで好きなようにしたいという思いが語られている。「趣味が合う人がいない」「話が合う人がいない」では、商売をしているときはお客さんとの会話に必要なことから、野球や相撲等、自分の趣味ではないことも含めていろいろと研究をしたりしていたが、そのようなことをする気持ちがなくなったことや、ニュースなどを話題にしたいが、そのような話も合わないと言っていた。

「曜日毎の活動は好きでないので参加しない」「嫌なことはしたくない」「気が向かない」では、毎日の体操やカラオケも趣味ではないので参加しないと語られた。

「嫌なことには何も言わないで聞き流す」「話しかけてきた人とは当たり障りのない話はする」「人と関わってもいろいろあるから、人と関わらなくてもいい」大勢がいるところに参加すると人の噂話など聞きたくない話が出るので、参加しないのが一番良いと言っている。

「ひとりですきなようにしている」「親も兄弟もみんな死んでしまったので誰にも気兼ねしなくていい」「以前の生活とは切り離しているので、入居する前の友人とは付き合いたくない」では、入居する前までの生活と現在の生活とは別の生活であると考え、自分に正直に生きているという思いが語られていた。以上のことから【気兼ねせず好きなようにしたい】と命名した。

⑦【人に迷惑をかけたたくない】

このカテゴリーには、家族や友人、施設の職員に対する遠慮や、人に迷惑をかけたたくないという思いが語られていた。「家族に迷惑をかけたたくないでここに入ろうと決めた」では、家族も高齢となり体のことも心配であ

るため入居を希望したことや、ここではいろいろとあるが体の心配もなく、いつも体の事を考えてくれている、また家では食事も3食自分で作らなくてはいけませんが、ここでは安心できていると言っている。

「家族があまり外には出るなというので、デイサービスのときしか出ない」「80代になると出ていくのがたいそうになるし、危ない気がするので行けない」「骨折でもしたらみんなに迷惑がかかるので、外出しない」では、年齢が高くなるにつれて体のことも心配であり、転べば骨折するのではないか、骨折をすればみんなに迷惑がかかるのではないかという不安な思いを表現していた。

「友達が遊びに来たいと言うが、タクシー代がかかるから私が会いに行くと言って、会いには行っていない」「友達が遊びに来て、隣の部屋の人とはドア1枚で声もよく聞こえるのでやかましいと思ひ、来ないでと言っている」では、友人にはここに入居すると伝えた時に驚かれたが、なかなか希望の通り入居できない場合もあるらしいし、昔とは考え方が違うので、年寄りも考え方を変えないといけな思っていると言われた。友人に、ここは良いところであると紹介しているが、団体生活の決まりなどもあるため、まだ自分がなじめていない現状を語られていた。

「催し物も行かないと悪いので参加はするが、そおと帰ってくる」「寮母さんに食事を持ってきてもらうわけにはいかないから、腰が痛くて動きたくないが、食堂に行くのだけは、私の運動だと思って降りていく。」では、施設職員に対する配慮も考えていることが語られていた。これらのことから【人に迷惑をかけたたくない】と命名した。

考 察

本研究では、施設入居者で自分から人との交流をもとうとしない高齢者がどのような思いで過ごしているのかを明らかにすることを目的とした。

1. 高齢者の思いについて

高齢者の思いとして、【この暮らしになじめない】、【周りに人がいるけれどさみしい】、【ここではしたいことがない】、【自分から人とかかわりたくない】、【体の調子が悪いので何かをしようと思わない】、【気兼ねせず好きなようにしたい】、【人に迷惑をかけたたくない】の7つの思いが明らかになった。

施設へ入居後の生活環境の変化に対して、施設職員や入居者等の力を借りて生活環境を改善しようとする中で人間関係の広がり期待されるが、【この暮らしになじめない】という思いからは、環境に対する関与行動も低下している対象者の思いが窺える。この思いは【周りに人がいるけれどさみしい】という思いをもたらし、環境に対する働きかけへのためらいの思いが混在していると考えられる。また、【ここではしたいことがない】という思いや【自分から人とかかわりたくない】、【気兼ねせず好きなようにしたい】という思いは、高齢者が施設での生活を受け入れるときには、利点を考慮した積極的な選択と、諦めを含んだ消極的な選択があると松岡ら¹¹⁾が述べているように、自分のありのままの感情を大切にしたいという思いによると考えられる。特に【ここではしたいことがない】という思いは、<ここでは>という新しい生活環境のなかで新たな過ごし方を見いだせない思いが表現されていると考えられる。また、【自分から人とかかわりたくない】という思いからは、これまでに人間関係に苦勞した思いや、新しい人間関係を形成するために人とかかわるよりひとりであったほうが良いという思いが窺え、これらの思いによって人との交流を制限していると考えられる。さらに、【気兼ねせず好きなようにしたい】という思いからは、施設入居により生活環境が変化しても今までの自分を変えることなく自分らしさを保持したいという強い思いが窺えた。

本研究で抽出された【人に迷惑をかけたくない】という思いは、松岡ら¹¹⁾が、施設生活や家庭復帰へ的高齢者の思いとして、家族の世話になることへの遠慮を明らかにしていることとも一致していた。高齢者が、家族、施設職員や入居者にかかる迷惑を予測あるいは考慮し、自ら交流を制限している思いは、生活の場が異なるものの先行研究^{2,12)}の結果とも一致をみた。

一方、高齢者が人とかかわりに消極的になる背景には身体的な問題も影響していることが【体の調子が悪いので何かをしようと思わない】という思いに表れていた。歩行能力をはじめとする、身体能力の低下が不安になり、活動そのものに消極的になる思いが表現されていた。

2. 高齢者の閉じこもりの意味について

沖中¹³⁾は、在宅で老いを生きる要介護高齢者の自己意識について、目の前に立ちだかる自分の老いに対して今までの成功体験や自身の考え方や価値観、同じ苦しみ

や痛みが通じ合う仲間との交流を通して、老いに立ち向かえる力になると述べている。このことは、高齢者が自分らしく生きるためには、他者との交流が重要であることを示唆するものである。

また、城¹⁴⁾は高齢者の発達を支援する環境づくりとして、発達とは、新しい環境との関係性（集合性）を獲得するために主体と環境との関係性を更新していくプロセスであると述べている。新しい環境での関係更新は全て発達と考えている。その考えに立てば、高齢者が自宅を離れ施設に入居することは、新しい環境での関係更新に直面することに他ならない。

今回の対象者の思いには、人間関係の構築つまり新しい環境での関係更新において、自分の信条を大切にしようとする思いが、強くでていた。対象者にとって閉じこもりは自分自身のその人らしい生活のありようのひとつとも考えられた。高齢者の閉じこもりを単に問題行動として評価するのではなく、その根底には、自分の信条を大切にしたいという思いがあることを理解することが重要である。さらに、自分の心情を大切にすることと、新しい環境での関係更新との調和を図ることが、施設入居高齢者支援において必要であると思われる。

今後に向けては、高齢者の生活背景を考慮して入居当初から関係形成を計画的に進めることが必要と思われた。また、活動が消極的にならないように体調管理が重要であると考えられた。

3. 本研究の限界

本研究は、一施設の調査であり、また対象者も限局している。また今回、自分から人との交流をもとめしない高齢者と設定したが、性差や入居期間がどのように影響するか探索ができていない。

結 論

本研究では、施設で自分から人との交流をもとめしない高齢者10人にインタビューを行い、以下のことを明らかにした。

1. 【周りに人がいるけれどさみしい】という思いや【この暮らしになじめない】という気持ちを持ちながらも、あえて【自分から人とかかわりたくない】という生き方を貫いている。
2. 【体の調子がわるいので何かをしようと思わない】という思いと、【ここではしたいことがない】とい

う思いを抱いており、生活環境が変化しても自分の信条は変えないという強い意思がある

3. 今までの人生経験に培われた自分の思いを大切にし【人に迷惑をかけたくない】という思いや【気兼ねせず好きなようにしたい】という思いは、これからの生活も自分らしく生きていくという力強い意思の表明であると考えられた。

謝 辞

本研究への御協力を快く承諾していただき、貴重な思いを語ってくださった対象者の方々に心より感謝いたします。

本研究の主旨を御理解いただき、快くフィールド・ワークの場を提供し協力していただいた研究対象施設の職員の皆様に心よりお礼申し上げます。

文 献

- 1) 竹内孝仁：閉じこもり予防，介護予防研修テキスト（厚生労働省老健局計画課監修），社会保険研究所，128-140，2001.
- 2) 藺牟田洋美：虚弱・「閉じこもり」高齢者に対する心理的介入の意義，東保学誌，6（2），111-118，2003.
- 3) 古田佳代子，流石ゆり子，伊藤康児：在宅高齢者の外出頻度に関連する要因の検討，老年看護学，9（1），12-20，2004.
- 4) 恒吉玲代，永山寛，涌井佐和子 他：地域在宅高齢者における「閉じこもり」と身体活動状況および体力，体力科学，57，433-442，2008.
- 5) 新開省二，藤原幸司，藤原佳典 他：地域高齢者におけるタイプ別閉じこもりの予後2年間の追跡研究，日本公衆衛生雑誌，52（7），627-638，2005.
- 6) 藺牟田洋美，安村誠司，阿彦忠之 他：自立および準寝たきり高齢者の自立度の変化に影響する予測因子の解明 身体・心理・社会的側面から，日本公衛誌，49（6）483-496，2002.
- 7) 横山博子，芳賀博，安村誠司 他：外出頻度の低い「閉じこもり」高齢者の特徴に関する研究—自立度の差に着目して—，老年社会科学，26（4），424-437，2005.
- 8) 森淑江，佐々木康子：在宅要介護高齢者の「閉じこもり」に関する研究，群馬保健学紀要，23，17-24，2003.
- 9) 山崎幸子，藺牟田洋美，橋本美芽 他：都市部在宅高齢者における閉じこもりの家族および社会関係の特徴，日本保健科学学会誌，11（1），20-27，2008.
- 10) 中村陽子：高齢者の特別養護老人ホームへの適応，福井大学医学部研究雑誌，6（1/2），41-55，2005.
- 11) 松岡広子，濱畑章子：介護老人保健施設の長期入所者が家庭復帰よりも施設生活の継続を望むまでの過程，Quality Nursing，10（7），53-63，2004.
- 12) 鳩野洋子，田中久恵：地域ひとり暮らし高齢者の閉じこもりの実態と生活状況，保健婦雑誌，55（8），664-669，1999.
- 13) 沖中由美：在宅で老いを生きる要介護高齢者の自己意識，日本看護研究学会誌，34（2），119-129，2011.
- 14) 城仁士：do for から do with へ 高齢者の発達と支援，6-7，ナカニシヤ出版，2009.

*Feelings of elderly nursing home residents
who do not proactively attempt to interact with others*

Masumi Matsuda¹⁾ and Toshiko Tada²⁾

¹⁾Tokushima Prefectural School of Nursing, Tokushima, Japan

*²⁾Department of community nursing, school of health sciences, institute of health biosciences,
the University of Tokushima graduate school, Tokushima, Japan*

Abstract An increasing number of elderly people are confining themselves to their rooms even at nursing home. The present study aimed to clarify the feelings of nursing home residents who do not proactively attempt to interact with others.

Semi-structured interviews were conducted on 10 nursing home residents (3 men and 7 women with an average age of 76.8 years, standard deviation of 7.9 years; length of residency, 6 months-14 years) following approval from the ethical review board of our university. We categorized the narratives of the subjects in the verbatim record. The following 7 categories were extracted from interview transcripts: 'I am unable to adjust to living here'; 'Despite there being people around me, I am lonely'; "There is nothing I want to do here"; 'I don't want to approach others'; 'I can't think of anything to do due to my poor health'; 'I want to do as I like without hesitation'; and 'I don't want to bother others'. These categories depict nursing home residents as living in loneliness due to passivity in the environment promoted by feelings of not wanting to bother others, poor health and an inability to approach others or attempt to find desirable things to do due to failure to adjust to the people or environment.

The present findings indicate the necessity of creating an atmosphere in which elderly residents can adjust to the environment and can systematically begin to form relationships from the start of residency. Management of physical health is also required to prevent residents from becoming passive.

Key words : Feelings , elderly, nursing home residents